人 物 紹 介

岩 崎　龍 郎

結核予防会結核研究所　森　亨

静岡県の出身，「龍郎」の名は天竜川で産湯を使ったから，とは本人からも聞いた。若いころの論文の著者名には「竜郎」の字も多い。1940年，東大病理学教室から新設の財団法人結核予防会結核研究所に移り，岡治道，隈部英雄のもとで結核病理学の研究に従事，2人の前任者が切り開いた初感染発病学説の病理学の体系化を行い，さらに化学療法の臨床病理学研究，そしてこれとX線所見上の関連など，化学療法時代に入った日本の，結核対策の理論的基礎の確立に重大な貢献を果たした。1955年の日本結核病学会総会の特別講演「肺結核の化学療法に関する臨床的ならびに病理形態学的研究」は化学療法をした群としない群においてX線所見からみた病巣（新しい肺炎型，細葉性播種型，浸潤型，また空洞や乾酪巣など）がどのように変化するかを観察したもので，その後，化学療法中の患者におけるX線所見の変化の解釈に大きな影響を与えた。さらにこの講演のなかで，岩崎はこのような所見の変化に関連する要因として菌の毒力，化学療法レジメンの強さなどについて検討し，さらに化学療法有無別に見た菌所見の消長，再発や耐性獲得，化学予防など病理形態学を超えた結核治療に関しても検討をし，当時から見た近未来の結核対策を占う考察を行っている。その後も早期肺がんのX線診断など，結核対策技術の他の分野への応用に関しても努力を怠らなかった。

1961年，隈部のあとを受けて結核予防会結核研究所の所長（第5代）になり，さらに国の結核予防審議会の委員，委員長，日本結核病学会の理事，会長，理事長など，日本の結核対策・研究のリーダーとして貢献した。

おなじ病理学者だった前任者たちと共通して，基礎学者ながら臨床，公衆衛生にも深い理解を示し，今の言葉で言うならば「証拠に基づいた対策のための結核病学」を目指した。化学療法の時代に入った結核治療について，いちはやく英国のグループがインド・マドラスで行った一連の研究（安静対非安静，外来対入院，栄養の添加対非添加の無作為対照試験）を紹介して，化学療法のもとではもはや安静，そして入院が治療に本質的に必須のものでないことを説いた。これは当時いまだ大気・安静・栄養の呪縛から脱しきれないでいた日本では，左右の両陣営から批判を受けることになった。岩崎は全く意に介しなかった。旧時代からのしがらみのない筆者などの世代は岩崎のいうとおりのことを臨床で実践し，おなじ予防会の一部の先輩からすら批判されたものだった。

（岩崎龍郎）

おなじ信条から岩崎は日本の結核対策や研究の国際化を熱心に推進した。1963年に日本政府の戦後賠償計画であるコロンボ計画の一環として国際研修が結核研究所で始まると，当時の世界的な専門家を講師として招請した。これは研修生のみでなく，研究所のスタッフ（おそらく岩崎自身も含めて）を大いに刺激するところとなった。こうして来日して我々に深い影響を与えた講師としてはFox，Toman，Styblo，Grzybowski，Rouillon，Waalerなど枚挙にいとまがない。岩崎は，英語は必ずしも流暢でなかったが，彼らとの議論では要所要所でポイントを押さえた意見を述べたので，彼らは「プロフェッサー・イワサキ」の結核に対する深い見識に例外なく敬意を払っていた。

同様に新しい結核対策の流れを作っていたWHOにも早くから専門委員として加わり，1974年の第9回結核専門委員会では，会議で策定された委員会報告をジュネーブでの会議の帰路に飛行機内で翻訳してしまい，帰国後いち早く我々に最新の世界の流れとして示してくれた。訳者前書きには，日本の結核医療・対策にこの報告書に示されている国際的な標準が適用されるようにとの期待が表明されている。

1951年に著した「結核の病理」（結核予防会）は不朽の名著で，半世紀後に同じ著者が改訂版を出したが，骨組みは変わっていない。この中でもうかがえるが，この著書（というよりは結核病理の理解の中で，というべきであろう）に足りないものとして免疫学的アプローチがあると感じていたようである。このことは遺稿となった1997年（90歳）の本誌論文「20世紀における結核分野の研究の進歩を顧みる」のなかで期待を表明し，また少し前に臨床免疫学の露口泉夫といわばコラボレーション（往復書簡）を行っていることにみることができる（結核症の研究に関するいくつかの覚え書き：結核・呼吸器疾患の資料と展望. 1994 ; 8 : 15−21）。

病理形態学者にふさわしく，絵を描くことを愛した。岩崎のX線読影は我々から見ると神業に思えたが，そのスケッチは芸術品だった。外国出張の際にカメラで撮ってきた風物をあとで油絵に描いて楽しんでいた。その作品のいくつかは結核予防会の機関紙「複十字」の表紙を飾った。